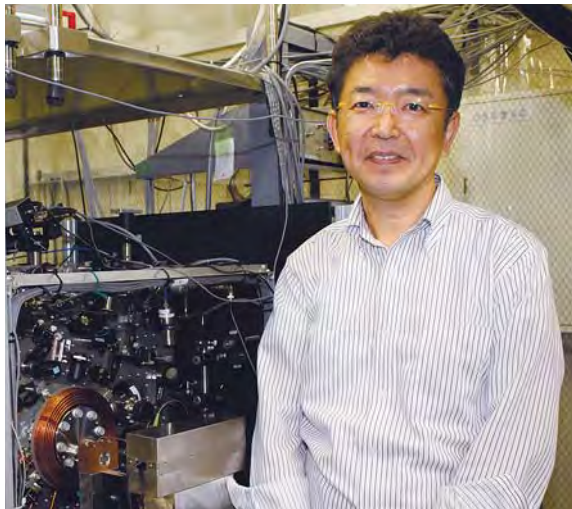


「独り」「仲間と」有意義な時



光格子時計の前で、香取秀俊さん

を隠されたこともある。中学3年から高校1年

までは「小説の時代」。太宰治を中心に国内外の小説を朝から晩まで読んだ。

小説の世界にのめりこみ、数学の難問を夜通し考える。1人であることで満ち足りていた。人から命令されたり教わったりするのは嫌い。自分で

ゴールを探すような仕事がいい、と小説家も考えたが、「あんな過激な生活はできない」と物理の研究者を目指した。

東大に入り、博士号取得後、ドイツの研究所へ。そこで命じられた研究はつまらなく感じた。しかし、そこに世界中から訪れる研究者から最先端の情報を聞く中で、光格子時計のアイデアが生まれた。

160億年に1秒しか狂わないという超高精度な「光格子時計」を開発、ノーベル賞候補とも言われる東京大学教授の香取秀俊さん(51、1983年卒)。



「本当に生きている情報は、ネットではなく人からしか得られない。人間関係が大事だ」という西成活裕さん

「1人で楽しめる時間があったのがよかった。好きな世界を見つけてどっぷりはまってみる事が大事です」

対照的に「仲間とワイワイ楽しんだ」高校、大学時代を過ごしたのは、東京大学教授の西成活裕さん(49、85年卒)。車や人などの渋滞を理論的に研究する「渋滞学」の生みの親だ。

中学までの「勉強ができることを隠さなくてはいけない雰囲気」から、高校では一気に解放された。仲間たちと議論したり勉強を競い合ったり。「スポーツは体にいいし、モテるかも」と始めたサッカー部はレギュラーになれなかったが卒業まで続けた。毎日の練習の後、ラジオの深夜放送を聞きながら深夜まで勉強した。

アニメ「宇宙戦艦ヤマト」をきっかけに、宇宙に興味を持った。研究者になろうと東大に進むと、非常に優秀な学生たちが集まっていた。政治の話から宇宙の果ての話まで、夜を徹した議論は、今でも研究に役立つている。

「今は大学や企業、官公庁などで中心になっている彼らとのつながりが財産です。利害関係のない友達を作れるのが学生時代だと思います」

(編集委員・吉田由紀)